

内的余暇動機スケールと余暇退屈度スケールの解釈シートの実践開発

茅野宏明（武庫川女子大学）

キーワード アセスメント、治療的意味あい、解釈シート

目的

「レクリエーション活動援助が利用者にどんな効果をもたらすか」という疑問に対し、財団法人日本レクリエーション協会では1974（昭和49）年度から高齢者を対象とした「高齢者レクワーカー養成セミナー」の開講と「調査研究事業」の実施¹が始まった。その研究を踏まえて、千葉ら（1985）²は老人ホームにおいてレクリエーションワークにより：①老人の相互援助意識；②行動；③態度や生きがい；そして④日常生活の社会性に効果があることを示した。その結果に統計的な分析を施した結果：①問題行動の改善；②社会性の向上、に影響を及ぼしたことがわかった³。

一方、介護福祉士国家試験にレクリエーション活動援助法が位置づけられ⁴、レクリエーション活動援助によるレクリエーション活動の治療的意味あいの理解と明示性が社会的に求められている。レクリエーション活動の治療的意味あいを醸し出すため、セラピューティックレクリエーションの発祥地であるアメリカにおいてもアセスメントの大切さが強調され、アセスメントに関する論文等を別冊にまとめ、アセスメントの大切さと活用や開発を啓蒙した⁵。

（財）日本レクリエーション協会の研究助成により、野村・茅野・佐橋（1997）⁶が内的余暇動機スケール（Intrinsic Leisure Motivation Scale⁷、以下ILM）と余暇退屈度スケール（Leisure Boredom Scale⁸、LBS）についての邦訳版（以下、余暇アンケート）を発表した。さらに、1997年より余暇アンケートとその解説書を添付してインターネット上を通じて啓蒙を図り、現在のべ200件以上の配布が行われている⁹。

ところが、尺度の解釈が非常に大切な一面もありながら、解釈は解説書だけを頼りに実施者が個々に行うにとどまり、ともすれば誤った解釈を促しかねない一面も備えている。啓蒙する責任上、適正な解釈の普及が重要となる。

そこで、本研究の目的は、内的余暇動機スケール（Intrinsic Leisure Motivation Scale、以下ILM）と余暇退屈度スケール（Leisure Boredom Scale、LBS）の解釈を容易にする「解釈シート」を実践的に開発することである。具体的には、余暇教育プログラム参加者の事前評価（pretest）と事後評価（posttest）に使用している余暇アンケートの解釈過程を利用して、解釈シートを実践に即した様式に仕上げることを最終目標とする。

余暇アンケートの概要と課題

余暇アンケートはILMとLBSからなっており、双方ともreverse codingを用い、指定された設問の回答を反転する必要がある。ILMでは24設問中3設問を、LBSでは16設問中8設問を反転する。回答を反転する設問は回答記入者のバイアスを最小限に食い止める意味では有効である反面、解釈法が複雑になる一面も持ち合わせる。

余暇アンケートへの回答を解釈する際、指定回答を適切に反転し、それぞれの尺度の平均値を求める。その後、算出した平均値と合致する解釈とを照合する。ここまでのプロセスからILMとLBSの解釈を見いだすことは比較的容易にできる。

そこから先の解釈は余暇アンケートを実施した者の判断に委ねられる。つまり、平均値による解釈の後：
①平均値とは異なる回答；②平均値を支持する回答、を割り出し、数値だけでは読み取れない各設問の内

面的要素を抽出し、回答記入者の状態を推察する必要がある。このような内面的要素を把握する作業は時に複雑であり、解釈の結果を誤る恐れもある。アセスメントや効果測定に役立つ余暇アンケートを誤って解釈することは、例えば利用者への支援過程に直接影響を及ぼすため、避けなければならない。

このように余暇アンケートの課題は、熟練した研究者やプログラム実施者でなくとも、解釈シートを用いれば正当な解釈を導き出せること、に絞られる。本研究では、平成 9 年度から使用している余暇アンケートの解釈実績をもとに、解釈シートの作成を実践的に取り組んだ。

解釈シートの作成

解釈シート(表 1)の作成にあたり、操作マニュアルの必要性を最小限にとどめることをコンセプトに、次の具体的条件を設定した。

- ①事前評価 (assessment) と事後評価 (evaluation) の両方に使用可能とする
- ②データ入力後、平均値や差異値などをできる限り自動的に算出する
- ③カラーや記号を使用する
- ④設問文も提示する

これらの条件を満たし、先述の手順に従って集計をすること考慮して、見積書やデータ処理などで一般的に使用されている日本 Microsoft 社の Excel を解釈シート用のアプリケーションとして採用した。その結果、解釈シートのフォーマットは Excel ブックとして保存され、代表的な OS (Windows と Macintosh) 上で使用可能となる。

解釈手順の決定

解釈シートの作成にあたり、解釈手順を列挙した後：①解釈シートを作成；②既存データを使用して実際に解釈；③余暇教育プログラムスタッフや生活支援員による指摘；④不適切な手順を抽出；⑤解釈手順の改訂、という修正過程を繰り返し行った。その結果、解釈に必要な手順が次のようにまとめられた。

- ①余暇アンケートの回答を同じ数値を解釈シートに入力する(半自動処理)
 - a) 反転の必要がない回答は、そのまま「調整」欄に自動表示される
 - b) 反転の必要がある回答の処理は、次の②を行う
- ②反転する回答欄(グレーの網掛け)を次のように反転した数値を手入力する
「5」→「1」； 「4」→「2」； 「3」は不変； 「2」→「4」； 「1」→「5」
- ③ILM(24 設問)の平均値が「総合的な自発性」に自動表示される
- ④LBS(16 設問)の平均値が「総合的な退屈度」に自動表示される
- ⑤事前評価値と事後評価値の両方が入力されていると、その差異が自動表示される
- ⑥「自発性の解釈」の該当項目を●印で塗りつぶす
- ⑦「退屈度の解釈」の該当項目を●印で塗りつぶす
- ⑧「自発性(上記⑥)と退屈度(上記⑦)の関係」について、該当する方を●印で塗りつぶす
 - a) 反比例であれば、自発性と退屈度の双方を解釈対象にする
 - b) 比例または関係不明であれば、退屈度だけを解釈対象にする¹⁰
- ⑨「自発性の解釈」の●印と「同傾向の選択肢」に注目する
 - a) 同傾向の回答番号の欄(セル)を「緑色」で塗りつぶす
 - b) 緑色のセル数を「自発性の支持率」欄(網掛け)へ入力し、%を自動計算する
- ⑩「退屈度の解釈」の●印と「同傾向の選択肢」に注目する

- a) 同傾向の回答番号の欄(セル)を「緑色」で塗りつぶす
 - b) 緑色のセル数を「退屈度の支持率」欄(網掛け)へ入力し、%を自動計算する
- ⑪「自発性の解釈」や「退屈度の解釈」とは異なる回答を総括的に列挙する
(事後評価の場合、事後の回答を列挙する)
- a) 異なっても、余暇に対して否定的な回答に★印をつけて記述する
 - b) 異なっても、余暇に対して肯定的な回答に☆印をつけて記述する
- ⑫「注目項目」の回答を入力する
- a) 設問 30 (LBS の第 6 設問) の回答を手入力する
 - b) 設問 34 (LBS の第 10 設問) の回答を手入力する
- ⑬事後評価の場合、利用者による主観的評価となる「終了時の感想」を転記する
- a) 否定的な感想の冒頭に★印をつけて転記する
 - b) 肯定的な感想の冒頭に☆印をつけて転記する
- ⑭「まとめ」に、上記③～⑬の解釈と行動変容を総合的に考察した結果を記述する
- ⑮まとめから「プログラム運営にフィードバックすること」を考察して記述する

まとめ

本研究の目的は、ILM と LBS を含んだ余暇アンケートの解釈を導きやすい解釈シートを開発することであった。実践で役に立ち、かつ解釈にバイアスがかけられないように配慮するために、余暇教育プログラムの事前評価と事後評価に使用している手順を明確化した上で見直し、純粋な解釈を導き出すことを主眼に手順を決定した。

余暇教育プログラムのスタッフや生活支援員らの指摘により修正を加えた解釈シートには、①事前評価と事後評価の両方に使用；②Excel の自動計算機能を活用；③カラーや記号などを使用；④設問も提示、を盛り込んだ。実践での使用には、利用者の状態を簡潔に示すことができるという意見があり、実践の使用には耐えることが明らかになった。一方、解釈シートの妥当性などについての検証は行われていない。

今後の課題として：①Excel 使用下で自動計算が可能な解釈シートの開発；②解釈シートの妥当性や信頼性の実践的調査；③簡易なマニュアルの作成、があげられる。特に後者については、アセスメントの未経験者などを対象に同じデータに対するアセスメント結果の相違を検証する手法に取り組む必要がある。

¹ (財)日本レクリエーション協会編(1983). 在宅老人におけるレクリエーション活動の実践的研究(その1)。「はじめに」に記述。(財)日本レクリエーション協会発行。

² 千葉和夫、天野勤(1985). レクリエーション・ワークの効果測定を試み、レクリエーション研究, 14, 57-63.

³ 茅野宏明(1989). 実験的手法におけるデータ解析の応用に関する一考察、レクリエーション研究, 20, 1-8.

⁴ 1990年より、「レクリエーション指導法」が国家試験科目として位置づけられた。2000年より「レクリエーション活動援助法」と改称された。

⁵ National Therapeutic Recreation Society(1996). The Best of the Therapeutic Recreation Journal: Assessment. National Recreation and Park Association.

⁶ 野村一路・茅野宏明・佐橋由美(1997). 余暇生活設計のためのツール開発に関する研究(II)、自由時間研究, 21, 40-49.

⁷ Weissinger, E. & Bandalos, D.L. (1995). Development, reliability and validity of a scale to measure intrinsic motivation in leisure. Journal of Leisure Research, 27, 379-400.

⁸ Iso-Ahola, S.E. Weissinger, E. (1990). Perceptions of boredom in leisure: Conceptualization, reliability, and validity in the leisure boredom scale. Journal of Leisure Research, 22, 1-17.

⁹ LEEPnetのホームページ(<http://LEEPnet.com/>)より申し込み可能。

¹⁰ 前掲6)、44-47を参照。

	事前評価日を記入	事後評価日を記入	差異		
総合的な自発性	3.9	3.9	0.0	同傾向の 選択肢	
総合的な退屈度	3.1	2.7	0.4		
①自発性の解釈	●3.9以上	●3.9以上	自発性が強い・・・取り組んでいるものあり	4、5	
	○3.3-3.8程度	○3.3-3.8程度	自発性が比較的強い・・・取り組みや興味持ち始め	4	
	○2.8-3.2程度	○2.8-3.2程度	混沌状態・・・余暇への意識不足	3	
	○2.2-2.7程度	○2.2-2.7程度	自発性が少し弱い・・・余暇の認識不足や誤解	2	
	○2.1以下	○2.1以下	自発性が弱い・・・余暇への罪悪感や嫌悪感	1、2	
②退屈度の解釈	○3.9以上	○3.9以上	退屈を強く感じる・・・取り組んでいるものなし	4、5	
	○3.3-3.8程度	○3.3-3.8程度	比較的退屈を感じる・・・取り組めるきっかけなし	4	
	●2.8-3.2程度	○2.8-3.2程度	混沌状態・・・余暇への意識不足	3	
	○2.2-2.7程度	○2.2-2.7程度	あまり退屈を感じない・・・取り組みや興味持ち始め	2	
	○2.1以下	○2.1以下	ほとんど退屈を感じない・・・取り組んでいるものあり	1、2	
③自発性と 退屈度の関係	○反比例	●反比例	→ 上記①と②を解釈する		
	●比例 or 不明	○比例 or 不明	→ 上記②のみを解釈する		
④自発性の支持率	18	75.0%	19	79.2%	(%) ①の解釈を支持する割合
退屈度の支持率	6	37.5%	8	50.0%	(%) ②の解釈を支持する割合

⑤一般的に①や②の解釈とは異なる回答の総括(★→否定的な回答、☆→肯定的な回答)

★余暇や余暇活動の他に人生において重要なものがあると思う。

★余暇に対して、あまりワクワク感を感じない。

★何かしたいけど、何をしたいのかわからない。

★余暇の大半を寝て過ごす方だと思う。

★余暇活動の技能をあまり多く身につけていない方である。

★余暇が退屈なのか、することがあるのか、重要な一部分なのか、どちらとも言えない。

⑥注目項目 a)設問30(他に何をしたいのかわからない): 4 → 2

b)設問34(何をしたいのかわからない): 5 → 4

回答の選択肢 1:そう思わない 2:それほど思わない 3:どちらでもない 4:少し思う 5:そう思う

⑦終了時の感想 ☆自分自身が身体障害者になったけど、世間には色々楽しみや出来る所が

ある事を教えたもらい、前例等も聞かしてもらいはげみになった。

☆自分に対して利用ができる所等を一緒に探してくれ、またなおかつパン

フレット等を作成してくれた。

☆ありがとうございます。

⑧まとめ

「何かできることを探したい」という参加動機を満たすように、興味や関心を引き出すことに注目しながら、ユニットを進めた。

上肢の筋力に自信がなく、いろいろな事は思うようにできないと感じていた様子であったが、自主的にワークシートを進めながら、「温泉旅行」をテーマに決定した。その後、身近な温泉に行くことを第一段階の目標と定め、近隣の温泉施設をまとめたファイルを情報誌とともに提供した。

外出できる範囲や障害者割引の有無、手すりの有無などを丹念に調べながら、

「癒しの湯(仮称)」を第一候補にしたが、急遽退所になりプログラムを終了。

アンケート数値や感想から、短期間に自尊心や可能性を深めたと判断できる。

⑨プログラム運営にフィードバックすること

(1)本プログラムでの前例やさまざまな可能性を含む情報提供などを、継続していく。